

Les 24 heures du roman

主催

L'écriture en mouvement

Édition Japon

24 時間小説－日本版



日本の文化、伝統、
そして空想の世界に根ざした
一風変わった文学イベント



公式ウェブサイト：ecriture-en-mouvement.org

お問い合わせ：アンヌ・フォレスト＝ウィルソン

anne@ecriture-en-mouvement.org

Les 24 heures du roman

日仏が紡ぐ、比類なき文学の冒険

京都- 松江- 東京

12名の作家、千の物語、 ウリポ流創作技法による制約のもとで生まれる、新たな文学体験

2026年秋、「24時間小説」の新たな未公開エピソードが日本で開催されます。2026年10月22日、京都。フランス人作家6名、日本人作家6名、そして日仏の翻訳者数名が、伝説の豪華列車「瑞風」に乗り込みます。

レッドカーペットが敷かれ、カナッペが振る舞われます。控えめなベルの音——いや、そこまで控えめではないかもしれません。出発のしばらく前、ついに作家と翻訳者たちに物語の筋書きが伝えられます。ベルが鳴る。溜息か、それとも安堵の吐息か。彼らは何を感じているのでしょうか。その思いは——松江でぜひ直接確かめてみてください。

一つの筋立て、一つのテーマ、登場人物たち。12人の手による、昼夜を通した24時間の文学の旅——夜の果てへと向かう創作の旅が始まります。ページが、言葉が、そしてアイデアが絡み合う。各作家が一章ずつ、列車の走行とともに物語を紡いでいきます。そのあいだも、どこか古風な魅力をたたえたこの動く宮殿は、眠れる日本を縦断し、静かに走り続けます。コオロギさえも鳴きやんだ夜。繭のような空間。閉ざされた創作の時間。午前1時、午前2時、星空に月が輝き、物音ひとつない静けさが広がります。抒情に満ちた縦断の旅。唯一無二の冒険。一人は皆のために、皆は一人のために。一編の小説が誕生するのです。

彼らは誰か。国境を越える協働

24時間という限られた時間の中で、フランスと日本を結ぶ特別な絆を育みながら、12名の優れたベテラン作家がただ一つの小説を共に書き上げます。

参加者はいずれも、名誉ある文学賞を受賞してきた文学界を代表する作家たちです。

日本側の作家は、全員が芥川賞受賞者。

フランス側は、2020年ゴンクール賞受賞者エルヴェ・ル・テリエをはじめ、ウリポ（制約や言葉遊びを通して文学の新たな可能性を探求する創作集団）の主要メンバー、そして現代文学を代表する作家たちが参加します。

また、卓越した才能を持つ翻訳者たちも本プロジェクトに参加します。言語の橋渡し役として、二言語・二文化による未踏の作品を共に織り上げていきます。

こうして誕生するのは、約288ページに及ぶ一編の小説。読者の心を奪い、驚嘆させ、魅力的で忘れがたい世界へと誘う一冊となるでしょう。

Les 24 heures du roman

企画：アンヌ・フォレスト＝ウィルソン

実施：**L'écriture en mouvement**

フランス語の乗客：

ポール・フルネル（ウリポ）

エルヴェ・ル・テリエ（ウリポ）

フレデリック・フォルト（ウリポ）

ジャン＝クリストフ・グランジェ

ミュリエル・バルベリ

リシャール・コラス

日本語の乗客：

荻野アンナ

朝吹真理子

円城塔

金原ひとみ

松浦寿輝

辻仁成

フランス語翻訳者：シルヴァン・カルドネル他、選定中

日本語翻訳者：選定中

Les 24 heures du roman

京都- 松江- 東京

24 時間小説- 三つのムーブメント

京都- 1 - 京都から松江へ、小説を書く時間

旅の序章として、フランス人シェフ、ブランシュ・ロワゾーが「小説の24の味」へと誘います。味覚の記憶や美食の体験は、「瑞風」車内で日本人シェフが提供する料理と響き合いながら、自然と物語の中に溶け込んでいきます。文学と食の体験が重なり合い、この旅ならではの創作の土壌を育みます。

列車は静かに動き出し、文学の冒険が始まります。実際には、それより少し前——物語を導く「制約」が発表された瞬間から、すでに冒険は始まっています。車内では創作の熱気が高まり、アイデアが次々と生まれ、交わされ、発展していきます。やがて最初のページが文字で満たされ、それは豪華列車のやわらかく安定した走行リズムとともに進んでいきます。

どこでもない場所での、あるいは確かに〈どこか〉での神秘的な停車。思いがけず、しかも喜びに満ちた停車は、日本の奥深い世界との出会いへと私たちを導きます——この美しく幻想的な土地の〈歴史〉と〈物語〉の中心へと。昼間、虫の音が響くなかで。あるいは夕暮れ時に。そこには夢のように、抒情に満ちた時間が流れます。想像と現実が溶け合い、境界は次第に消えていく。すべてをいったん忘れ、幻想の世界へと身を委ねるひとときです。

松江- 2 - 冒険は続く

この少し風変わりな、どこか夢のような24時間の旅を経て、一冊の小説が誕生します。12名の作家と才能あふれる翻訳者たちは松江に到着し、「瑞風」を降ります。**疲れを感じる間もなく、**彼らは華やかな歓迎に迎えられます。レッドカーペット、祝福の雰囲気、そして駅を満たす高揚感。少しずつ緊張がほどけ、人々は語り合い、言葉を交わし、笑顔が広がっていきます。

ここから始まるのは、もうひとつの章——「出会い」の時間です。

エクスプレス・ブックフェア。自由で率直な対話。即興の創作ワークショップ。町全体が言葉のリズムとともに静かに、そして確かに息づき始めます。二日間にわたり、松江は生きた本のように開かれ、脈打つ空間となります。住民と作家が出会い、互いを知り、響き合う。多くの人にとって、それは小説が生まれる瞬間、その創作の神秘を間近に感じる貴重な体験となるでしょう。

東京 - 3 - 円環、東京へ還る

東京への帰着翌日、最後のエクスプレス・ブックフェアが開催されます。

ここではこの挑戦が祝われ、24時間の創作の軌跡が広く紹介されます。

この大胆な試みを支えたすべての人々とともに、成功の喜びを分かち合います。数多くの才能が24時間という限られた時間の中で出会い、ともに成し遂げたこの経験——それは、特別な創造の瞬間と言えるでしょう。

そして最後に別れの時。再会を約束しながら、この物語は静かに幕を閉じます。

Les 24 heures du roman

東京から遠い、もうひとつの日本

松江一人を惹きつける、深い趣をたたえた街

松江で、物語はひとたび歩みを止める。松江で、物語は新たな息吹を得る。東京や京都はフランスでも広く知られています。では松江とは——どこにある街なのでしょう。定番の観光ルートから少し離れた場所。この列車による壮大な旅の目的はただひとつ。24時間で、一冊の小説を共に書き上げること。作家たちは12の章を執筆し、その半分はフランス語、もう半分は日本語で紡がれます。翻訳者たちはフランス語で書かれた章を日本語へ、日本語で書かれた章をフランス語へと訳していきます。

伝説的な豪華列車「瑞風」の車内で過ごす24時間。笑い声に彩られ、美食の時間を味わいながら、時に思いがけなく、しかし綿密に計画された停車を織り交ぜ、列車は西日本各地の美しい風景を巡ります。土地との出会い、人との出会い。そのすべてが創作へと静かに溶け込んでいきます。そして旅の果てに——作家と翻訳者たちは松江に降り立ちます。

水と静寂の街、松江。湖を抱くその姿は、まるで忘れられた一篇の詩のよう。松江の魅力は多彩です。美術館や博物館、歴史を語る城郭、そして甘味と滋味に富んだ食文化。豊かな美の中に広がる、味覚の世界。

松江はあらゆる出会いを受け入れる場所。ここで作家たちは小説を分かち合い、必要に応じて物語に最後の細やかな筆致を添えます。

来場者に向けた没入型文化体験

松江に到着した作家たちは、最初の読者と出会います。言葉を中心に広がる特別な時間。ワークショップやトークセッション、朗読会を通じて、人々は語り合い、交わり、新たな発見へと導かれます。すべてのプログラムは、フランス語と日本語の二言語で実施されます。

言葉と遊ぶ創作ワークショップでは、ウリポ的発想のもと、言葉を自在に操り、俳句を詠み、連歌の伝統へとつながります。執筆のマラソン。読書のマラソン。フランス語でも日本語でも、あらゆる参加者に向けたプログラムが用意されます。

24時間小説を象徴するエクスプレス・ブックフェア。一日限りの書店、あるいは期間限定の図書館として展開されるこの空間では、参加作家の作品に触れ、直接対話できる貴重な機会が生まれます。紹介、対話、自由な交流。夢想し、語り合い、共有し、創造するための時間が広がります。

文化、共有、想像力が出会う場所

和菓子作り体験：本やペン、列車などをかたどった和菓子の制作。

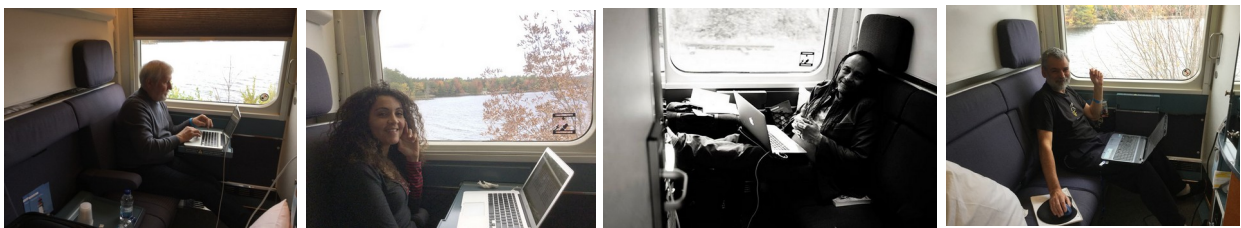
書籍の表紙制作ワークショップ：コンテスト形式、各種表彰。

子どもたちとの物語制作：タウトグラム形式（例えば松江の「M」のように、物語のすべての言葉と同じ文字から始める手法）でストーリーを作り、イラストも手がける共同制作。



第一回開催を振り返って

「24時間小説」第一回開催は2015年10月、カナダで実施されました。この開催はフランスの探検家サミュエル・ド・シャンプランのオンタリオ州到達400周年を記念するものでした。24名のフランス語作家が、ハリファックスからトロントへと移動する列車内で、24時間にわたり共同で創作に取り組みました。こうして誕生した作品が『シャンプランの足跡をたどって——24の情景からなる特別な冒険』です。本作は2015年11月に刊行され、文学的な成果はもちろん、異文化が交差する創作体験としても高く評価されました。



「私はカフェで書く。かつて列車の車内で書いていたのと同じように。想像上の存在に惑わされないために。そして、通り過ぎる未知の人へと目を向けることで、喜びや苦しみの正しい尺度を取り戻すために。」

ジョルジュ・ベルナノス 『月の下の大いなる墓地』 (1938年、プロン出版)

Canada 2015

